



書評

「移動する子ども」の壮大な家族史

一青妙 (著) 『私の箱子^{シャンズ}』 講談社, 2012年

川上 郁雄*

■要旨

本書は、「移動する子ども」である著者がその当事者として書いた「移動する子ども」の家族の歴史である。幼少期より複数言語環境で成長した子どもの記録と記憶、日本と台湾の間で構築されるアイデンティティ、さらに植民地主義の影響下で生きてきた、世代を超えた「移動する子ども」の家族の事例を提示している点で優れた学術的成果と言える。

■キーワード

「移動する子ども」
台湾
アイデンティティ
日本語族
植民地

©2012. 「移動する子どもたち」研究会. <http://www.gsjal.jp/childforum/>

この書は、女優であり歯科医師である著者の一青妙（ひとと たえ）が家族の「果てない絆」を描いた「初エッセイ」（本の帯から）であるという。しかし、研究者の視点から見れば、本書は「移動する子ども」である当事者しか書けない壮大な家族史であり、その意味で、極めて貴重な学術的なデータを含む稀有な著作であると考えられる。以下、本書が単なるエッセイではなく、なぜ学術的な価値のある書であるかを述べるとともに、「移動する子ども」学に貢献する書であることを論じる。

はじめに本書の概要を述べておこう。本書は、「私の箱子（シャンズ）」「台湾の“野猫”（イエマオ）」「閉ざされた部屋」「母が逝く」「顔家物語」「『顔寓』の主」という6つの章とあとがきから構成されている、284ページの書である。物語は、著者が、家族で住んでいた家の解体中に見つけた箱（中国語で箱子・シャンズ）から著者の亡き父や母の写真や記録を発見するところから、始まる。著者の父は、顔惠民（イエンプェミン）という。台湾の五大財閥のひとつで、鉦山王と呼ばれる顔家の長男として1928年に台湾で生まれた台湾人であった。著者の母は、一青かづ枝といい、1944年に東京で生まれた。一青という姓は、石

* 早稲田大学大学院日本語教育研究科（Eメール：kawakami@waseda.jp）

川県能登半島の一青（ひと）という土地にある母方の姓である。ふたりは、東京で出会い、1970年に結婚した。国籍の違いも、16年の年齢差も越えた国際結婚は当時としては「希少価値」のある結婚だったと、著者は述べる。そして、同年に東京で著者が生まれる。そのときの「母子健康手帳」には、「■母の氏名 顔 和枝 ■子の名前 顔 妙」と記載されていた。

本書は、上記の箱から発見された父母の手紙や写真から、家族の記録や著者の記憶をつなぎ合わせる作業が軸となって展開されていく。著者は生後6ヵ月で両親とともに台湾に渡り、12年間滞在する。第1章は著者の生後の経緯について述べられている。第2章は、著者が台湾で過ごした小学校時代の様子が語られる。第3章は、台湾と日本の中で生活し、心の病を抱え、最期はがんで亡くなった、著者の父の物語である。著者は当時、中学生であった。第4章は、そのような父と結婚した著者の母の物語である。母も、父の死後、がんで亡くなった。著者が大学生のときであった。この間の出来事は、手紙や日記、写真などによって詳細に述べられると同時に、著者が中学生から大学院生、歯科医、女優と成長していく時期と重ね合わされ、著者と家族の心情が細やかに描かれている。続く第5章は、父の家系についての章である。台湾の財閥の盛衰が語られる。最後の第6章は、本書の中で60ページを超える最も長い章で、著者が中学生だったときに他界した父の本当の姿を理解すべく、記録をもとに歴史を再構成し、昔の友人や親族や関係者の記憶と証言を求めて、台湾に、そしてアメリカへ旅をする、本書の圧巻の章である。著者の父について書かれている第3章が55ページで、第3章と第6章を合わせると、本書の3分の1が著者の父をめぐる物語で占められることになる。そのことは、著者にとって父の存在がいかに大きかったか、また父を知れば知るほど、そのような父に寄り添った女性としての母の気持ちも著者に深く理解されるようになったことを意味した。本書は、箱の中から出てくる記憶のつるが曲がりくねりながら、徐々に国を超えた大きな樹木に成長するかのようには舞台女優ならではの視点と工夫で構成されている。その文章のきめ細かさと壮大なドラマの構成力は、著者の力量を示していると言えよう。

では、本書の学術的な意味はどこにあるのか。それは、以下の3点である。

第一点は、幼少期より複数言語環境で成長した子どもの記録と記憶という点である。著者は、東京で生まれ、生後6ヵ月後から台湾に渡り、以後12年間という成長期を台湾で過ごすことになった。そのため、「私は台湾語、中国語、日本語の三つの言語環境の中にいたことになる」(p. 53)と述べている。幼少期の記憶はほとんどないと言うが、母子手帳には、「言葉を喋り始めるのが普通の子より大分遅く、母親としてとても心配した」と記されていた。しかし、いったん話し始めると、「スラスラと三カ国語を使い分けるようになっていた」(p. 53)という。

この頃から、著者は、「なんとなくほかの人と自分が違うのではないかと感じ取っていた」(p. 53)と言うように、多言語環境で生きる自分自身を見つめ、そして周りを見て行動する

意識が見える。したがって、「相手次第で言葉を使い分け、接し方まで変えられるバランス感覚に優れた子供になった」(p. 53)と著者が振り返りつつ、同時に、「耳障りな大人の会話はラジオのノイズのように、聞いていない、聞こえていないという『無』のフォルダへ。敵になり得るような人は『回避』のフォルダ。そうでない人は『無害』のフォルダへと振り分けを本能的におこなって、自分をさらけ出すことが損だと感じる場面では、自分の思いは封印し、ときには言っていることが理解できていないようにふるまい、周囲を観察し、慎重に行動していた」(pp. 53-54)と幼少期の自身を述懐している。しかし、そのような生き方が器用にできているように見えても、「心とのバランスが保てない部分もあったようだ」と述べるように、おねしょや夜泣き、時には原因不明の高熱が出て、家族を心配させたこともあったようだ。

このような証言は、「移動する子ども」の成長過程のストレスやアイデンティティ形成を考えるうえで貴重な証言だ。

著者が台湾に住んでいたとき、近所に住んでいた日本人家族の子どもや近所の台湾の子どもたちと日本語と台湾語で遊び、学校は日本人学校ではなく現地校に入学し、中国語（北京語）で学習した。そのため、今でも、「暗算するときは無意識に頭の中で中国語を使っている」(p. 58)と語る。台湾の中国語の学校文化にどっぷり浸かると同時に、家庭では日本のビデオなどを見て歌ったり踊ったりしてふんだんに日本語に触れ、日本語と中国語ができる台湾人の父や、中国語を話すお手伝いさんや運転手、台湾に来たときはまったく中国語がわからなかった著者の母が、日本語と中国語と台湾語を駆使して買い物の値引き交渉までできる姿を見て、著者は成長していく。

しかし、小学校 6 年生のときに日本に帰ることになり、東京の小学校の帰国子女受入れ校に入り、日本の学校文化にショックを受ける。背景知識のないまま受け、教科学習に戸惑う著者の様子は、教科学習の学びが分断される例である。日本語の日常会話は問題がなかったが、繁体字の漢字を書いたことからクラスメートから批判された。また学習院女子中等科への入学試験では、中国語で作文を書いた。台湾の小学校時代に書いた中国語の作文も本書に例示され、その頃の著者の中国語による文章構成力が垣間見えるのも貴重な。その後、著者の中国語能力についての意識は、成長するにつれて変化していく。その点は、子どもの持つ複数言語能力を考えるうえで重要な点である（川上，2010）。

本書が学術的な意味のある書であることの第二点は、幼少期より複数言語環境で成長する子どものアイデンティティ構築を考える上で、本書が極めて貴重な事例を提示しているという点である。幼少期より「ほかの人と自分が違う」と著者は感じていた。そのため、「父親が台湾人、母親が日本人。台湾人でもなく、日本人でもない。台湾人であって、日本人でもある」(p. 52)と著者が自身について述べる意識は、成人後にも継続している。著者は台湾の小学校へ通っていた頃、「台湾からときどき帰国して滞在する日本での生活は『楽しい』という記憶しかない」(p. 78)と述べる。また、「台湾では常に周囲に溶け込むために保護

色になるよう努めていた」ため、著者は自身を「カメレオン・妙」と呼ぶが、日本に一時帰国すると、「日本ではそんなことをする必要がなく、何をしても、どれもこれも気楽で、心地よかった」(p. 78)と振り返る。そして、一家で日本に「帰国」した後の最初の変化は、名前の変更であったと言う。「日本の生活に適応しやすいように、父の姓の『顔』から母の姓の『一青』になった」と、名前のことを挙げている。台湾では「顔妙 (イエンミャオ)」と呼ばれ、発音の似た「野猫 (イエマオ)」とあだ名された著者が、「自分の名前が変わる不思議な感覚」を経験する。

人のアイデンティティを構成するものは国籍や名前だけではない。その頃、著者は「台湾の『カメレオン・妙』は日本に行けば考えをきちんと言える人に変身できると思ってきた」と語る。これが一回めの変身のチャンスであったが、うまくいかなかった。続いて著者は学習院女子中等科へ進学する。そのとき、中国語で作文を書いたほどだったが、「当時、中国語はマイナーだったので、自分が帰国子女だということを言わなくなった。英語を話せず、見た目には違いがわからないハーフは注目もされず、『カメレオン・妙』は完全な日本人の色に変わり、自分が変わるチャンスも逃してしまった」と語る。これが、2回めの変身のチャンスであった。自身が変われる3回めのチャンスは、大学へ進学したときだった。「誰も過去の私を知らない環境のおかげで少し気持ちが吹っ切れ、心の空が晴れた」という。そして、バックパッカーとして一人で海外を旅して、世界中を漫遊する。その旅先で著者は自分自身のルーツを考えることになる。「英語が通じない国でも、どんな辺境に行っても、チャイナタウンや中華料理店が必ずあり、中国語が話せれば無条件に友だちになれた。台湾を離れて約十年が過ぎていたが、世界各地への旅を通し、あらためて台湾人とのハーフであることが私の中によみがえってきた」(p. 137)と語る。著者が自身の中にある文化資本としての複数のことばの力を実感し、自らのアイデンティティを省みる瞬間であった。

著者は自身の性格を、「いい加減な」(性格)と言ったり、「他人と必要以上のコミュニケーションを取ることにストレスを感じるタイプ」(p. 159)と分析する。また、「歯科医と役者というまったく異なる二つの世界を行き来することが性に合ったのかもしれない」(p. 162)と自身の性格と今の生業について語っている点も興味深い。なぜなら、この語りは、幼少期より複数言語環境で成長し、常に他者の視線の中で、複数の言語を駆使して他者との関係を取り結ぶことを通して自己のあり方を模索してきた「移動する子ども」としての著者の生き方の、現段階での帰結であったと見えるからである。この著者のアイデンティティについては、最後に再度、検討することにした。

本書が学術的な意味のある書であることの第三点は、「移動する子ども」の家族の歴史を提示している点である。著者の父、顔惠民は、1928年、当時、日本の植民地であった台湾で「日本人」として生まれた。「父は学校教育で教育勅語を暗記させられ、日本語教育を徹底的に叩き込まれた世代。家族とも日本語で話し、自分は日本人だと思っていた」(p. 204)という。内地外地とは言ったが、同じ日本の教育を受けるために、著者の父は、10

歳から 19 歳まで東京で過ごした。すぐ下の弟と身の回りの世話をしてくれるお手伝いさんと一緒に台湾から送り込まれた。父は学習院中等科へ進学したが、終戦を迎え、1947 年にいったん台湾へ「帰国」する。どうして著者の父が 10 歳のときに台湾から東京へ「留学」したかと言えば、父の父、つまり著者の祖父、顔欽賢も、1902 年に台湾で生まれた後、幼少期より日本に「留学」させられ、1928 年に立命館大学を卒業し、台湾に帰り、鉦山王の三代目となった経緯があったことと関連する。また、著者の父の母、つまり著者の父方の祖母にあたる女性も、学校の総代になるほど成績が優秀で、著者の母が父と結婚した頃、著者の母へ手紙で「皆さんと一緒に暮らせる日を首を長くして待っています」と達筆な字で書かれ、「かしこ」と結ばれた手紙を送るほど、日本語のできた人であった (p. 237)。

このような家族の歴史は、日本が台湾を植民地支配した長い歴史と切り離せない。終戦後、日本人とは見なされなかった顔惠民は、敗戦のショックから心の病を患った。さらに、台湾に帰って、鉦山王の四代目として中国語を使い会社を切り盛りしていたが、台湾になじめず、苦しんだ。台湾と日本の間を行ったり来たりする著者の父は、台湾から長女の著者には日本語で手紙を書いた。そのような台湾から、思春期を過ごした日本へ戻った後も、著者の父の心の病は続いた。著者の母は著者の父に酒の肴に必ず煮魚やおひたしのような和食を用意していた。そのことを例に著者は、「長く日本で生活した父にとって、日本語が『母国語』であるのみならず、和食も『母食』であった」(p. 102)と述べている。そして、「日本人として育てられながら日本人であることを否定された父。二つの『国』に引き裂かれたアイデンティティーの問題に父は悩み続けてきた」(p. 206)と著者が述べているが、著者の父は、複数の「国」に関わる歴史の中で生まれた、複数言語環境で成長する、まさに「移動する子ども」の事例と言える。

著者は、著者が中学生のときに他界した父の記録や足跡をたどり、親族や関係者から父の思い出を尋ねる旅を経て、実際は日本人と台湾人との「ハーフ」(著者のことば)である著者自身のアイデンティティに向き合っていく。「自分自身のアイデンティティーについて少し、心を向けてみたい。そんな風に、考えるようになった。そしてそれは父の人生、父の苦しみをもっと理解することを通じ、実現するに違いない」(p. 206)と語る。このような著者の考えは、「移動する子ども」が「移動する子ども」の家族の歴史と生き様を深く考えることを通して、自らのアイデンティティを再構築していくように見える。

このように、著者自身が「移動する子ども」であるばかりか、その背景に、父や祖父に至る「移動する子ども」の歴史があり、それを日本と台湾の間に横たわる壮大な歴史が取り囲んでいたように見える。そのことを、著者は次のように考察している。

二十世紀前半に日本が台湾を五十年間統治したことは、台湾社会にとっても大きな影響を残した。日本語教育を受けた世代を中心に、いまでも多くの方々が日本語を母国語のように操り、NHK の衛星放送で連続ドラマ小説や大河ドラマ、年末の紅

白歌合戦を見ることを楽しみにしているのだ。これらの人々は一九四五年まで「日本人」として育ち、台湾が中華民国になった後も「日本語族」として生きてきた。もし父が生きていたら、間違いなくそうした「日本語族」の一人になっていただろう。

一方、終戦と同時に台湾から日本に戻った日本人の中にも、実は両親や片方の親が台湾人で、ふだんは日本の名前を使っているが、台湾人の名前もちゃんと持っていて、台湾に行ったときなどは台湾名を名乗っている人も多い。

私のように日本人であり台湾人である人がいて、日本と台湾との間を、まるで同じ敷地にある母屋と離れのように行き来しながら生きている人がけっこういるのである。 (p. 282)

と述べ、東日本大震災のときに台湾からの義援金が他国に比べて多かったのは、台湾人にとって日本が他人のように思えない関係があるからだと解釈している。そのため、国際結婚家族である顔家・一青家の家族は、「とっても複雑でややこしいけれど、心と心でしっかり繋がっている日本と台湾の関係を象徴している。それが、私の結論の一つでもある。」(p. 282) と述べている。

このように、本書は、顔家のような「移動する子ども」の家族が時代の中に無数にいたであろうし、時代的にも 100 年前から存在していたことを私たちに思い起こさせる。「移動する子ども」とは、幼少期より複数言語環境で成長しながら複数言語を使用したという経験とその意識のこと(川上, 2010) だが、そのような意味の「移動する子ども」が顔家の一族の中に世代を超えて脈々と受け継がれているように見える。本書は、「移動する子ども」が決して現代だけの現象ではなく、歴史を遡り、歴史の中に存在することを強く主張する。それゆえ、本書は「移動する子ども」学のフィールドを現在、未来だけではなく、過去に広く押し広げた点で、画期的な学術書であると、評者は高く評価したい。

最後に、著者は自身のアイデンティティについて次のように語る。

私にとっても台湾という存在は一度は離れてしまったが、いま、台湾との関係が「再開」しつつあるのは、不思議な偶然と言うべきだろうか。台湾に近づく一青妙。略して「台湾妙」。一人で自分をそんな風に呼んで楽しんでいる。 (p. 280)

著者の語りは、「移動する子ども」のアイデンティティ構築は、けっして子ども時代から青年期に見られる出来事ではなく、成人後も継続することを示唆している。もちろん、単言語で成長した人の場合も、アイデンティティ構築は成人後も継続するものであろうが、「移動する子ども」の場合のアイデンティティ構築には、幼少期からの複数言語環境の経験と複数言語を通じて構築された人との関わりについての意識が深く影響し、そのことの意味づけ

をめぐりアイデンティティ構築が継続的に変容していく。本書は、「移動する子ども」のアイデンティティ構築と家族の歴史を具体的に示した学術的価値のある貴重な書なのである。

文献

川上郁雄（2010）. 「移動する子どもたち」のことばの教育学とは何か『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』1, 1-21.

http://www.gsjal.jp/children/journal_01.html

川上郁雄（編）（2010）. 『私も「移動する子ども」だった—異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー』くろしお出版.

ジャーナル「移動する子どもたち」—— ことばの教育を創発する

第3号 2012年5月発行

発 行 者 「移動する子どもたち」研究会

代表 川上郁雄

169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-14

早稲田大学日本語教育研究センター気付

電話：(03) 5346-1893 Eメール：kodomoni-hogo@list.waseda.jp

©「移動する子どもたち」研究会 2012.